

インタビュー 平井千絵 (フォルテピアノ)

フォルテピアノは“しゃべる”楽器なのです

平日の昼下がり、銀ぶらの途中に気軽に立ち寄ってほしいという想いから始まった、王子ホール「銀座ぶらっとコンサート」。この人気シリーズに長年オランダで研鑽を積んだ実力派フォルテピアノ奏者、平井千絵が登場する。4月に続く「ぴあのの部屋」シリーズ第2回目のテーマは「女性に捧げられた曲たち」。18～19世紀初頭に演奏された、ピアノの原型であるフォルテピアノで、同時代に生まれた作品を聴くという趣向だ。

この時代の楽譜には、献呈された相手の名前が大きく書かれている。そこから「枝葉のように広がる人間関係のストーリーを知り、演奏へのイマジネーションが広がった」ことが、今回のテーマを選ぶきっかけとなったという。作品の背景を知って聴くことで、より興味を惹かれる楽曲ばかりだ。

例えば、モーツァルトが「きらきら星」変奏曲を献呈したヴィルトゥオーゾのアウエルマン嬢。

「モーツァルトは一番弟子である彼女の音楽性を褒め、エレガントですばらしいと称えているのですが、同時にその容姿についてひどいことを書いている(笑)。彼

女はモーツァルトのことが好きだったそうなのですが…。でも、作品には独創的な魅力があります」

また、初めてフォルテピアノを聴く人のために、その魅力を驚きをもって知ってもらえるような作品も。

「ゲリネクの『魔笛』のアリアの変奏曲は、ウィーンのフォルテピアノのピチピチとした歯切りの良い音が生きています。この楽器で弾くことでより魅力が明らかになります。彼は当時さまざまな大作作曲家と交流があり、ピアノ教師としても作曲家としても人気がありました。その証拠に彼の作品はほとんどが生前に出版されている。つまり、当時の趣味をとてもよく反映しているのです」

ウィーン製のフォルテピアノを弾くと「指が喜ぶ」という平井。もともと桐朋学園大学でモダンピアノを学んでいたが、卒業後、オランダのデン・ハーグ王立音楽院古楽器科に留学。フォルテピアノに没頭するようになった。

「弾いたとき、心が遊べる」と感じたんです。浅く軽いタッチで、“しゃべる”楽器なんですよ」

フォルテピアノは管理が難しく調律も

頻繁に必要なので、モダンピアノと違って演奏者が自ら調整をすることが多い。

「面倒が多いからモダンピアノが生まれ、一度は忘れ去られてしまった。それをわざわざ取り上げるということは、忙しい現代の生活からは少し逆行した行動ですよ(笑)。でも、そうやって自分の手で直すことができる安心感に、愛おしさを感じるのかもしれない」

演奏の前後には、お茶とお菓子を楽しむこともできるそうだ。サロンの雰囲気、慌ただしい現代のライフスタイルをつかの間忘れ美しいフォルテピアノが楽しめるとは、なんと贅沢な演奏会だろう。

取材・文:高坂はる香



銀座ぶらっとコンサート #56平井千絵「ぴあのの部屋」Vol.2～女性に捧げられた曲たち

★12月6日(火)・王子ホール ●発売中

☎ 王子ホールチケットセンター 03-3567-9990 <http://www.ojhall.jp>